



左から藤本壮介氏、隈研吾氏、大栗育夫氏、乾久美子氏。撮影：新建築写真部

環境と関係性

『30戸の住宅から生まれ変わる集合住宅』 長谷工 住まいのデザイン コンペティションへ向けて

隈研吾×乾久美子×藤本壮介×大栗育夫

「300人のための集合住宅」

2007年に長谷工コーポレーション創業70周年を記念して始まった「長谷工 住まいのデザイン コンペティション」。第1回目が「300人のための集合住宅」として集合住宅が作り出す密度を、第2回目が「30年後の集合住宅」として時間に対する変化をテーマとしました。それぞれ難易度の高いテーマでしたが、その分、集合住宅を考えるレベルの高い案が多く寄せられました。第3回目の新たなテーマに向けて、現状で考え得る課題を審査員に話していただきました。 （編）

30戸の曖昧さとリアリティ

——今回のテーマは『30戸の住宅から生まれ変わる集合住宅』です。このテーマについて、また、これまで2回のコンペについて、感想とお考えを聞かせていただけますか？

隈 第1回目のテーマにあった300人という規模は、それより少ない数字であれば具体性が出てきますが、実際のところは「多数」と意味はそれほど違いませんでした。時間についても、5年後ならばかなり現実的な提案が必要ですし、100年後ならば今は無関係な未来的にならざるを得ないのですが、30年後だとその間で各自に解釈が任されていたと言えるでしょう。一方で、今回の30戸の戸建て住宅を建て替えるとなると、よりリアリティが求められるでしょうね。その意味を深く考えなければならないというのは、これまでと違って面白いんじゃないでしょうか。

大栗 今回のテーマは設計の実務者の方が取り組みやすいものかもしれません。30戸の戸建てから、等価交換方式で60戸の集合住宅にするとか実際に事業化できるくらいに具体性があるからです。しかしこのコンペは、むしろ建て替え後の戸数は限定せず、自由に想定してもらった方が面白いアイデアが出てくるのではないのでしょうか。建て替え後の形は1棟に限らず、バラバラなものや、線形のものなど、いろいろ考えられると思います。テーマはシンプルながら、曖昧さが残っていて、自由に発想できる方がよいでしょうね。

乾 30戸というのは適度に曖昧さがあってよい設定だと思います。これまでの300人も30年もそ

れぞれ数と時間という点においては明確な単位でした。しかし30戸の場合、戸数はたしかに具体的なのですが、そこで暮らす人数は曖昧ですよ。30戸に暮らす人数をいかに設定するかというのは現代的な問題のような気がします。建て替え後の戸数を限定すると事業的な意味合いが強くなりすぎるので、住戸数は各自が設定できる方がよいと思います。

このコンペは毎回よい提案を応募してもらえるので、今回もレベルの高い提案を楽しみにしています。

藤本 前は回はテーマが大きかったのにもかかわらず、学生がちゃんと彼らなりのリアリティを持った案を出してくれたのが印象的でした。ただ、30戸という今回のテーマを考えると、やはりこれまでのテーマは漠然としていたと思います。というのは、敷地の設定を無視しているような案が多かったからです。しかし30戸のいわば街があってそれをまもめて建て替えるとなると、今ある環境からの連続性を考えなければなりません。それが今回の面白さだと思います。テーマによりリアリティがある分だけ、発想の手がかりは増えているでしょうね。もうひとつ今回のテーマが面白いと思うのは、密度の問題が提案の骨格になり得るということです。既存の30戸をそのまま30戸にするのか、それとも10戸にするのか、300戸にするのか、それは戸数の問題ではなく、どういった環境をつくり出すかということと関わってきますし、そのまま地球環境にも繋がる問題です。密度が高ければよいというわけではないし、低すぎるとリアリティがなくなります。そこで住環境に対する明確なビジョンが必要になるでしょうね。

集合住宅が街を変える

——課題敷地についてはどのような街を想定したらよいのでしょうか？

隈 今回課題となる敷地は、リアルな方がよいと思います。その場所が集合住宅になった時に、街がどう変わるか。それはマンション産業が都市に対して善たり得るのかという回答にもなります。つ

まり真価が問われるということです。テーマは周辺の環境とも深く関わってくるので、たとえばミニ開発のような敷地にするのか、下町の雰囲気が残るところにするのかで大きく結果が変わってくると思います。

藤本 ミニ開発のような敷地とすると、それに対するアンチテーゼのような案が多くなりそうでよくないでしょうね。それよりも、既によい要素をいくつか持っている街から、そのよさを抽出して、いかに新しいものへ置き換えていくのかというポジティブな発想ができる敷地条件がよいのではないのでしょうか。そうすることで、周辺の街を含めてどう変化させるかという視点が出てくると思います。単に集合住宅をつくるだけではなく、同時に街をつくるという相互的な視点ですね。具体的でありながら、広がりのあるような提案を期待します。

大栗 私たちが手がけた再開発でも、当初は開発に反対していた近隣の住民から、竣工した集合住宅を見て、同じようにできないかと声をかけていただいたことがあります。今回のテーマでも、周辺の人たちが連鎖してつくなっていきたいと思えるような、よい影響を与えるような地域開発に繋がる提案が見てみたいですね。

乾 たとえば高低差が明確な街はとても特徴のある場所になりますが、その特徴は具体的でもあり抽象的でもあるような感じがします。できている風景は固有性を持ちながらも一般的なでもあるような感じもします。高低差という要素が歴史や文化と無関係に街をつくる骨格になっているからかもしれません。何か、そうした場所を敷地にするのはどうでしょうか。

周辺の環境を考える

——では、現在の一般的な集合住宅について、どうお考えですか？

隈 集合住宅では通常、外部を第一に考えることは少ないのではないのでしょうか。できるだけボリュームを取って、できるだけ採光を取れるかだけに主眼が置かれがちです。もっと外部を考え、よ

い面でも悪い面でも既存環境にどう影響を与えたかを考えてほしいと思います。それは公共性を考えることにも繋がるんじゃないでしょうか。エコ的な環境問題も重要ですが、それよりも周辺とどう関わっていくかという環境の方により興味がありますね。

大栗 景観法で条例が制定され、これから周辺環境については、われわれも真剣に取り組んでいかなければなりません。つまり公共性は集合住宅において非常に大事になってくると思います。

隈 ただ、行政の判断では、長さ何m以上の壁面はだめだとか、建築を単体の彫刻的なものだと思っているのではないかと感じるがあります。われわれが目指す環境は別のものだということを伝えなければなりません。

地球環境と生活環境

——ではエコや、地球環境についてはいかがでしょうか。太陽電池など環境への取り組みに対して、補助金などのインセンティブが働くようになってきましたよね。

隈 エコはたしかに重要なのですが、今回のコンペでは性能的な話をしても仕方がないと思います。それよりも生活環境を考えてほしいですね。

藤本 そうですね。仕掛けや装置をどうしたかではなく、どういう生活環境を再発見できるのかがポイントで、それを具体的な形にまで落とし込んでもらえれば面白いと思います。たとえばエコ的な視点を考えるとしても、こんな生活が考えられて、こんな集合住宅ができるんじゃないかというようなことです。

そうした問題には、われわれプロの設計者も正面から対応していかなければなりません。それを若い人にも考えてほしいと思います。周囲に対して閉じない建築というのは、必ず環境に繋がることになります。それはある種の不自由さである場合もあるかもしれませんが、その不自由さとどう折り合いをつけて形にするのかにも興味があります。

乾 外的世界との関係性の持ち方を定義するのが重要だと思います。そこで地球環境問題を考えることはあくまでもその関係性のうちのひとつです。つまり関係性とはあらゆる要素を含んだ問題だからです。それをいかに広い範囲で捉えられるかが今回の鍵になると思います。ああ、こうしたものも環境のひとつかもな、と気付かせてくれるような提案があるとよいですね。

概念を突き崩す

藤本 ちょうど今オランダで集合住宅のコンペをやっているところです。小さなどかな街で、平和なところです。伝統的な三角屋根の住宅がぼつぼつと建っているようなところの密度を少しだけ高めるとというのが条件なのです。既存の街はそれほど不便とは言えないところで、そこをどう変化させる

か、そして周辺の都市環境をどうレベルアップさせるか、それを考えるのが面白いところです。今回のテーマのように、街が舞台となると、残すところと残さないところが出てくるでしょうが、それらを総合的に判断してほしいですね。

隈 たとえばヨーロッパの建築は新築の割合はかなり低く、ほぼすべてがリノベーションです。しかし、新築とリノベーションを分けること自体が20世紀的なものかもしれません。敷地という概念も所有権や売買という概念がなければ成立しないような曖昧なものです。だからそれを超えるような発想がほしいですね。一方で、僕が最近頻繁に行っている中国は逆の状況です。共産主義が続く中で、敷地の私有という概念が出始め、それが経済を活性化しています。ヨーロッパでも土地や建物の私有という概念を使って経済を拡大していこうとしてきました。本来なら手に入るはずのない別荘をいくつ

も持つように煽るのはその典型だと思います。しかしそれも資本主義の最後の持ち駒だったようにも思えます。それを使い切って破綻したのがサブプライムローン問題ですから、今度は私有化の後に何が来るのかに、僕は興味がありますね。

藤本 現状では戸建て住宅と集合住宅がはっきり分かれていますが、僕はその間にある領域に興味があります。両方の概念が混ざり合って、分断しないようなアイデアが出てくると面白いと思います。**隈** 戸建て、集合住宅という定義も、実は法律などに縛られた便宜的なものですよ。ですから、今回の30戸の戸建てを集合住宅に建て替えるというテーマ自体もその制度に縛られていると言えるかもしれません（笑）。その概念を突き崩して、課題自体を問い直すような提案が現れるとよいですね。

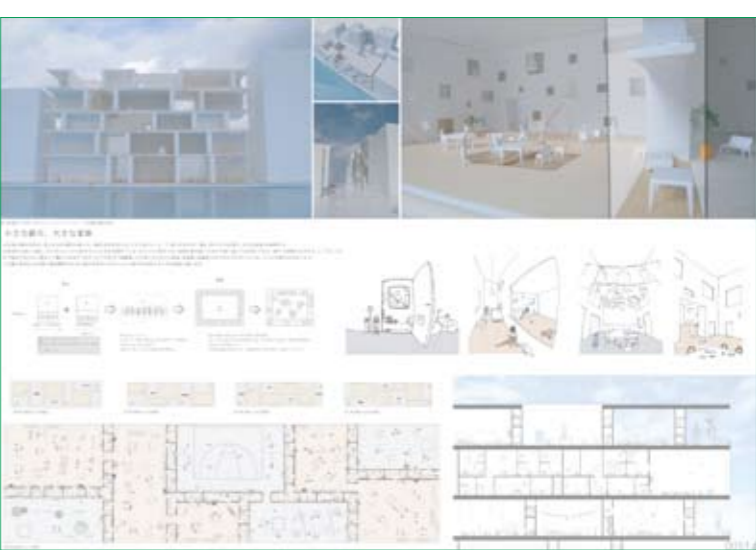
（2009年6月9日、長谷工コーポレーションにて 写真：高池栗子（慶應義塾大学大学院）

写真：本誌編集部）

「300人のための集合住宅」



第1回「300人のための集合住宅」最優秀賞「300人のランドスケープ」 高池栗子（慶應義塾大学大学院）+湯浅崇史（慶應義塾大学）



第2回「30年後の集合住宅」最優秀賞「小さな都市、大きな家族」 富山晃一+岩元俊輔+津野田祐基（鹿児島大学大学院）